

## 「水」に対する意識の向上について

寺 本 和 子

水資源の枯渇や水質汚濁等、現代の水に関する課題に適切な解決策を見出すためには、人々の「水」に対する意識の向上を図らなければならない。「水」に対する意識の向上とは、まず「水」を身近な存在として感じる事、そして「水」に関する出来るだけ多くの、そして正確な科学的情報を手に入れ、それを理解することである。「水」に対する意識の向上のためには、何が有効な手段になり得るのか、そしてどのようなことに留意すべきなのかということについて述べる。

### 1. はじめに

平成14年12月15日の日曜日に、国土交通省中部地方整備局の主催により、「三河湾環境クルーズ」が行われた。この催しは人々に三河湾の現状を船の上から実際に目で見てもらい、三河湾の水質や環境を守ることについて考えてもらうために開かれたものである。

蒲郡市にあるアミューズメント・スポットである「ラグーナ蒲郡」を発着点に、150人の親子連れなどが午前と午後に分かれて、それぞれ約1時間の船旅を楽しみながら三河湾の汚れの状況を実際に目で確かめたり、スナメリを探したり、海の環境についての話を聞いたりした。

ところで、翌日の新聞報道<sup>1)</sup>によると、

この「三河湾環境クルーズ」の参加に応募した人は約1600人と競争率10倍以上であったとのことである。このように多くの応募者があったということは、人々の三河湾の環境に対する関心の高さを示しているとも考えられる。又、応募者の多かったもう一つの要因は船に乗って三河湾を巡るという、普段ではなかなか経験できない内容の催しであったということがあげられる。三河湾の主要な港である三河港では、過去何回かにわたって「みなと祭り」といった催しが行われ、ここでも三河湾を巡る船旅が行われたことがあり、これも大変な人気であった。しかし、参加の動機は何であれ、この催しを通して人々の三河湾の環境への関心を高めてもらいたいという目論見は、ある程度成功したと考えられる。なぜなら、翌日の別の新聞報道<sup>2)</sup>には「船から三河湾を見る機会は貴重だ」と思い参加し

1) 中日新聞 平成14年12月16日 朝刊  
2) 読売新聞 平成14年12月16日 朝刊

ました。環境を改善し豊かな海に戻したいという思いになりました。」という参加者のコメントが紹介されていたからである。

## 2. 「水」に対する意識を持つことの必要性

水は私たちの大変身近な所に存在する。しかし、その身近さ、特に意識の上での身近さは時代と共に次第に失われてきたということが、しばしば指摘されている。それは、わかりやすく言い換えれば、「水」について気を使うことが無くなったということである。

水道の普及率の推移(図-1)<sup>3)</sup>を見ると、ほんの30~40年前頃まで水道は当たり前の存在ではなかったことが分かる。水道が無かったころは、井戸の水、又、川や湖の水も利用され、人々は水を汚さないとい

うことに注意を払っていた。そのための水の利用のルールもいろいろと存在した。そのような場合には、水の存在は大変身近なものであったらと考えられる。今でも、一部には日常的に人々が水を自ら管理しながら使っている場合もある。たとえば、観光地としても有名な郡上八幡の宗祇水は4段に分かれており、一番上の段は飲料水、二段目は米等の洗い場、三段目は野菜等の洗い場、4段目は「さらし場」として使い分けている。しかし、私たちはほとんどの場合そのような注意を払う必要も無く、蛇口から当たり前のこととして、きれいな水を得ることができる。その水は私たちが直接管理するのではなく、私たちに変わって、たとえば水道局という役所が管理してくれているわけである。そして、私たちの水に対する日常的な関心も薄れていったと言うわけである。

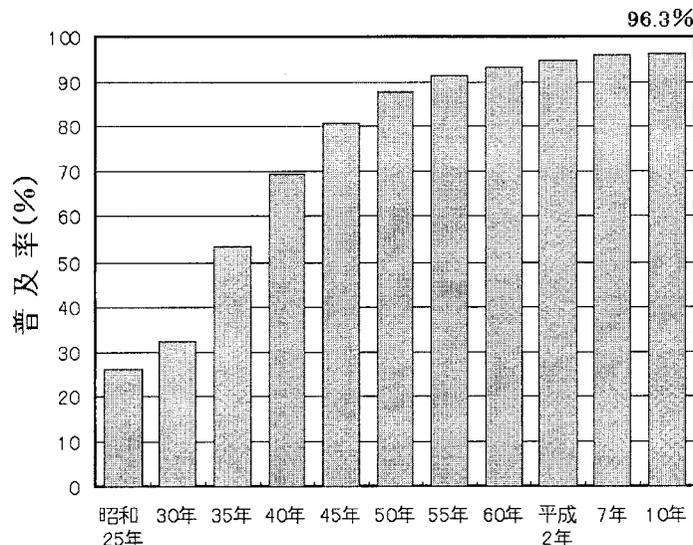
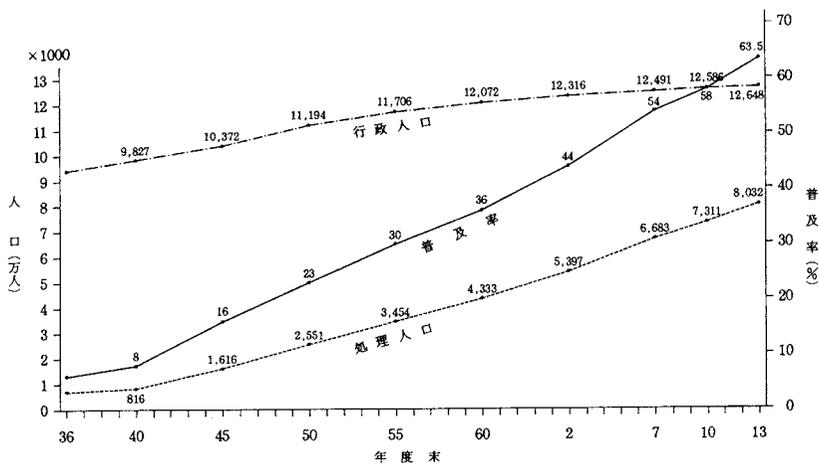


図-1 水道普及率の推移<sup>3)</sup>

3) 厚生省生活環境審議会水道部会資料 2002

図-2 下水道普及率の推移<sup>4)</sup>

一方、使い終わった水にも同じことが言える。水道ほどではないが、下水道も30～40年前頃から整備率が高くなって行ったことが分かる。(図-2)<sup>4)</sup> 下水道の整備が進むにつれて川の水質が改善した例が多く指摘されており、環境へ与える有効性は疑うべくも無いが、こと水に対する意識と言う面からは、やはり水道の場合と同じように、人々の汚れた水の行く末への日常的な関心を遠ざけたであろう。下水道等が整備される前には、人々は下流へ汚れを流さないように、汚れた水は溜めておいて畑へ撒いたりしていた。しかし、今では、私達はほとんど気を使う必要も無く、汚れた水は下水道や浄化槽が処理してくれることを原則とするようになった。しかし、実際には下水道等の浄化能力は現段階では限りがある。現代の水質汚染をある一面から象徴的に表現すれば、水道の普及率と下水道等の浄化能力の普及率とのギャップが招いた結果であるということも出来る。

以上のようにして次第に水が意識の上で身近な存在では無くなっていくにつれ、水を大切に使うとする心、水を汚すまいとする心も薄くなっていった感は否めない。しかし、現在問題があるからとは言え、再び過去に戻ることはできない。水道は多くの重労働から人々を解放したし、いつでも得られる清潔な水は日本人の平均寿命を延ばした大きな要因の一つであると考えられる。又、下水道を無くし、一人一人が汚水を処理することも技術的に不可能では無いかもしれないが、その効率性や個人での管理がどこまで責任を持って行われるのかなど多くの困難が伴うだろう。したがって、30年～40年前と異なり、現代の私たちの生活は水道や下水道という社会システムを前提とせざるを得ないと言える。そうであれば、このシステムがいかにすれば最も良く機能できるか、又、この機能の現在不足している部分をいかに補うことが出来るのか、といったことについて考える必要がある。しかし、人々が水道や下水道

4) 「日本の下水道」国土交通省 都市・地域整備局 下水道部 監修 1999

等の社会システムについて正しく理解し、そのシステムが最も良く機能するように行動し、その不足するところを補うためには、まずは人々の水への意識の上での身近さをもう一度取り戻すことから始めなければならないのである。

### 3. 自分の目で見ることの有効性について

それでは、どのようにすれば私達は水への意識の上での身近さを取り戻すことができるのだろうか。最初に紹介した「三河湾環境クルーズ」は三河湾の汚れなど環境の現状を直接目で見てもらうことで、三河湾の環境への興味を持ってもらうという狙いであり、ある程度の成功を取めたのであった。私も、かつて船で三河湾を巡るというチャンスを得たことが有る。確かに、この目で見たこげ茶色の海は衝撃的であった。又、その茶色の海で生息しているスナメリのけなげな姿にも打たれたものだった。そして、「私達は何とひどいことをしてきたのだろう。何とかしなければ。」という思いが強まった。「百聞は一見にしかず。」自分の目で見るということは、水の問題を意識の上で身近に感じる出発点となるであろう。

そこで、水への意識の上での身近さを取り戻すための一つの試みとして、私は平成14年11月に私のゼミに所属する学生など14名の学生と共に、豊川の現地見学を行った。学生たちは全員18歳から20歳の若い女性である。豊川の水がどのようにして我が家までたどりつくのかこの目で確かめ、毎日見ている水道の蛇口から出る水の

来し方について関心を持ってもらおうというわけである。学生たちは日ごろの教室での授業とは異なるスタイルの、バスを使っての現地見学による授業を歓迎しているようであった。見学地の主な所は宇連ダム、大島ダム、大野頭首工、万場調整池(以上、豊川用水関係)、牟呂松原頭首工(牟呂松原用水関係)である。各見学地では、それぞれの施設の説明を私、又は、水資源開発公団の職員の方が行った。

見学に先立ち、学生たちに尋ねたところ、宇連ダムと万場調整池には数人の学生が過去にも数回訪れた経験があったが、ほとんどの学生にとってはすべての見学地が初めて訪れる場所であった。又、宇連ダムと万場調整池を訪問したことのある学生も含めて、ほとんどの学生が豊川用水については全く知らないか、名前を聞いたことがある程度であった。又、すべての学生が「蛇口から水が出る」ことを当たり前と感じていると答え、毎年のように節水が呼びかけられているにもかかわらず、豊川用水がしばしば渇水に見舞われることもほとんどの学生が知らなかった。

すべての見学を終わった後の感想は、「豊川のダムや頭首工などの利水施設の役割や水がどのようなルートをとって私たちの家庭や農地等に届けられるのかについて理解できた。」「豊川用水の施設などを実際に目で見たり、豊川用水や森林の役割などについて話を聞いたため、水を大切に感じる気持ちが高まった。」「これから家などで水道の蛇口をひねった時に、今日見たような山や川の姿を思い浮かべることがあると思う。」「これから、渇水のニュースに対して今までよりも敏感になると思

う。」というものが多かった。たった1日の短い見学会ではあったが、水をもっと意識の上で身近に感じてもらうという目的は一応達成されたと考えて良いだろう。

学生たちは又、「普段、行けないようなダムや頭首工に行くことができ良かった。」、「今まで水に接する機会があまり無かったけれど、今日はいろいろな豊川の水に関する事について知ることが出来て良かった。」、「話を聞くだけでなく、実際に目にする事で吸収するものがあったと思う。」と、口々に実際にその場に行って自分の目で見ることの有効性を評価していた。又、「水の流れについては、小学校でも習ったが、今日の見学会では昔とは違った受け止め方をしたように思う。」という意見もあった。同じものを見ても、年代やそのときの立場などによって受け止め方が異なることもあるだろう。水に対する関心を高めるためには、その場に行くというきっかけを作ると共に、1度だけでなくいろいろな年代の時に見るということも有効であろう。

#### 4. 自分の目で見る機会を増やすには

水に対する意識の向上のために、自分の目で見る事が有効であることは確かであるとして、それではどのようにすれば自分の目で見る機会を増やす事が出来るのであろうか。学生たちも言っているように、多くの人は「なかなかこういうふうに見学するということはない」のである。

先に紹介した「三河湾環境クルーズ」は大変好評だったために、より汚染が高いだ

ろう夏にも開催したいと考えているようである。しかし、応募倍率が10倍を超えるほど人気が高いということであれば、もっと機会を増やすことを考えても良いだろう。以前、「スナメリ・ウォッチング」を豊橋の観光資源として考えてはどうかということを検討するための「体験ツアー」に参加したことがある。現代では世界も含め各地で「エコ・ツアー」が盛んに行われるようになってきた。海の環境に関する解説も同時に行い学習しながらのエコ・ツアーは、生涯学習意欲の高まりも受け人気の高いものとなるだろう。希望者があれば船を出せるような、常設のツアーとして位置づけてはどうか。

又、豊川の水をたどる旅もエコ・ツアーとしての位置づけが可能であろう。豊川の歴史や文化の話も交えながら、豊川の水について解説すれば幅広い人々に人気があるツアーとなるだろう。

又、ダムの周辺をピクニックの場所として整備し、ダムの管理所には資料館や展示館を設ければ、ツアーやピクニックのついでに立ち寄ってもらうこともできるだろう。現在でも大原調整池周辺ではピクニックが出来るように整備され、大島ダムにはちょっとした「展示室」があり、万場調整池には「水の資料館」がある。これらの施設の内容をより充実させ、P. R.すると共に、エコ・ツアーのルートに加えることが考えられる。

水に関する施設に限らず、役所やその他の公的機関が管理している施設の見学は、土曜日、日曜日は見学が不可能な施設が多い。それは、土曜日、日曜日は出勤している職員の数に限られるために施設の管理

上問題があったり、見学者に説明する職員が不在であるといったことが主な理由であると考えられる。しかし、大学の場合でも、今回私が行った豊川用水等の施設見学のような場合には、まとまった時間が必要であり平日に行くことは困難である。今回の見学会は土曜日であったにもかかわらず、水資源開発公団の職員の方が特別に出勤し、一部の施設について解説して下さった。しかし、このような特別出勤を気軽にいつも御願いできるというわけではない。又、私は、いずれ学生を連れて、今度は汚れた水の行く末を見る見学会を行いたいと考えている。そのためには下水処理場の見学も欠かせないと考えているが、電話で問い合わせたところ、やはり見学は原則として平日に行ってほしい旨の回答であった。

このようなことは水に関連した施設に限らず、その他の施設についてもほぼ同様であろうと思う。大学ではなく、一般家庭の人々であっても、たとえば家族連れで豊川の水をたどりたいと考えたとしても、多分その日は土曜日、又は日曜日である確率が高いと考えられる。せっかく現地にたどり着き見学した施設についてより詳しく知りたいと思っても、せいぜい看板が立っているといった程度で詳しい説明は聞くことが出来ない。せっかく自分たちの目で見えて水を意識の上で身近に感じるチャンスであるのに、その成果を一定以上収めることは困難である。

役所や公の機関であっても、一部には土曜日や日曜日に見学が可能な施設もある。しかし多くの場合その施設の役割を、より多くの人々に知ってもらいたいという努力は不足している。その施設の役割を知っ

てもらおう努力も、本来の業務であると理解する必要がある。前にも述べたように、この社会が水道や下水道といったようなシステムを前提としており、人々がそのシステムがより良く機能するように利用し、不足している部分は補う必要があるとすれば、人々に「水」に対する意識を向上させてもらわなければならないからである。

## 5. 「水」に対する「正しい」意識の向上について

今まで、まずは「水」を身近に感じるようになるために、その場へ実際に行って自分の目で見ることの重要性について述べてきた。

次のステップとして重要なことは「正しい」意識を向上させるということである。「正しい」意識を向上させる必要があるということは「水」に関する事柄に限らず、何についても言えることであろう。たとえば、何かについて意識が向上した（関心を持ち、自分も何かしなければと感じた）としても、その後に正しい情報に基づく正しい意識の向上が出来なかったとすれば、実際にどのように行動すればよいのかが分からなかったり、間違った行動へと結びつく恐れがある。そうなれば、せっかくの意識の向上が結果的に負の結果をもたらしかねない。

現代において水は意識の上では身近な存在で無くなったとは言え、毎日蛇口から出る水なら見ているという意味では、「水」は身近な存在でもある。その身近さのゆえに、いったん「水」を意識の上でも身近に感じるようになると、大変熱心に勉強し

発言するようになる人が多い。その熱心さ自体は喜ばしことではあるが、一つ残念なことはその人の得た限られた知識に基づいて簡単に結論を出そうとする傾向が見られることである。こういった傾向は、こと「水」に限ったことでは無いとは思いますが、「水」については先にも述べたとおり、ある面身近であるがゆえに、多くの議論が交わされ、しばしば感じられる傾向なのである。

議論を交わす時に、限られた知識にのみ基づいて短絡的に結論を出そうとしていないだろうか。このようなこのことは、もちろん自分自身にも当てはまる警告である。限られた本から得られた知識、限られた人から得た知識、物事のある一面から見たデータといったものだけを元として早急な判断を下した場合、判断を間違える可能性が高いと思われる。

何事にも早急に「白か黒か」をはっきりさせたがる人が多いが、ある分野の自然科学の法則を除けば、物事には100%確かなことはめったに存在しないだろう。確かなことがより多く存在するだろう自然科学の分野であっても、そこには多くの要因が関係している場合がほとんどであり、一つの要因を見落としたとしても結果が大きく異なってくることもあり得る。又、社会科学の分野に至っては人々の価値観や、行動傾向によって、時代によっても判断が異なってくる可能性がある。このような複雑で不確かな事柄に結論を下すためには、出来るだけ物事を多面的に評価した上で、その時点で最も納得できる判断を下す必要がある。

又、現代は、科学が政治を動かす時代で

あると言われている。たとえば「地球温暖化問題」はその好例である。自国の経済発展の足かせにならないようにしたいという思惑によって動こうとする勢力に対して、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が現在得られる限りの最新の科学的根拠に基づいて温暖化の予測や、その影響の予測を示し、国家の政治的判断に少なからぬ影響を与えている。

「正しい」意識の向上のためには、「正しい科学的情報」を出来るだけ多くの人々が共有する必要がある。特に「専門家」と呼ばれるような人たちは、自分の知り得た真実をできるだけ正確に表現する義務がある。

しかし、専門家は正しい情報さえ流していれば良いのであろうか。答えは「否」である。もし、一つの科学的情報を流そうとするのであれば、それは「一つの科学的情報」であって「すべてを表すことの出来る科学的情報ではない」ことを明らかにして示すべきである。

IPCCは地球の温暖化に関する科学的情報を示すために三つの部会を設置し、世界有数の科学者が集まって、発表された研究を広く調査し、それぞれについて評価を行っている。私達もこのように、ある事柄（特に因果関係が複雑だと思われるような事柄）についての判断を行おうとする場合には、多面的な科学的研究成果を調査し、評価する必要がある。

## 6. 例えば、三河湾の汚染の原因について

ここで、一つの例として三河湾の汚染に

についての科学的な側面について触れてみたい。なぜ、ここで三河湾の汚染について触れるのかというと、時に、ある一つの科学的研究成果が三河湾汚染の唯一の主たる原因を示しているかのような論調を耳にすることがあったからである。もちろん、それぞれの科学的側面が三河湾の汚染の「主たる要因の一つである」ことは正しいかもしれない。しかし、それがまるで「最も主たる要因である」か「唯一の主たる要因である」かのように表現することは、一面的な偏った判断を人々に与えることとなるので注意が必要である。特に専門家の立場にある人は科学が政策に与える影響を十分に配慮し、責任感を持って正確な表現に努める必要がある。

私は、ここで三河湾の各種の汚染原因と

考えられる項目について挙げていこうとしている。しかし、残念ながら、現段階で、私は三河湾のそれぞれの汚染原因について多くの詳細な科学的研究データを持っていない。従ってここでは、私が現在知っているだけの科学的側面の項目を出来るだけ多く挙げるに止まる。ただ、そのことによって三河湾の汚染についても、その原因は多面的であり、三河湾の汚染について議論しようとする人は、その多面的な情報を得る必要があること、従って三河湾浄化のための対策も多面的に行う必要があるだろうという趣旨を汲み取っていただければ幸いである。

まず、原因の一つには、干潟の減少が上げられる。図-3<sup>5)</sup>は明治32年ごろ、図-4<sup>5)</sup>は平成2年ごろの三河湾(渥美湾)の

大日本帝國陸地調査部 (豊橋市中央図書館所蔵)

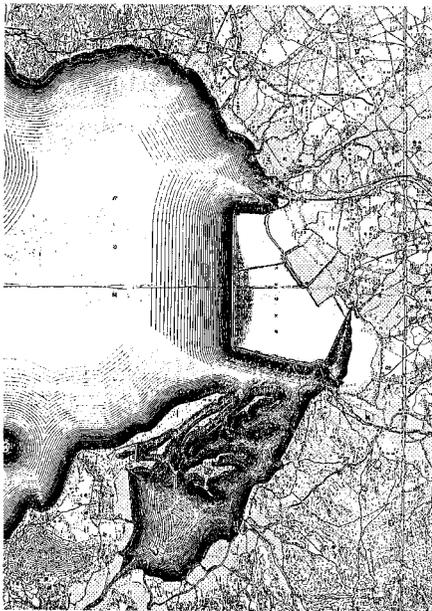


図-3 明治32年ごろの三河湾(渥美湾)の地形図<sup>5)</sup>

国土地理院



図-4 平成2年ごろの三河湾(渥美湾)の地形図<sup>5)</sup>

5) 「ひがた」 汐川干潟を守る会・編 文一総合出版 1993

地形図である。このように、過去には大規模に広がっていた干潟が埋め立てられている。三河湾では1945年から1978年の間に48%の干潟が失われている<sup>6)</sup>。干潟の浄化能力は下水道と比較しても大きなものがあると考えられる。

又、一つには、豊川の水を多く使うようになった結果であることが挙げられる。図-5<sup>7)</sup>は豊川 石田地点の流況である。年

により降雨量が異なるので流量の変動も大きい。豊川用水で一部通水が始まった昭和38年や全面通水が始まった昭和43年ごろにかけて、豊川用水の取水堰である大野頭首工より下流の新城市石田地点の流量の減少傾向が見られる。豊川からの流入量の減少も、三河湾の汚染の要因の一つであることが考えられる。

又、一つには、浄化能力を超えた人口の

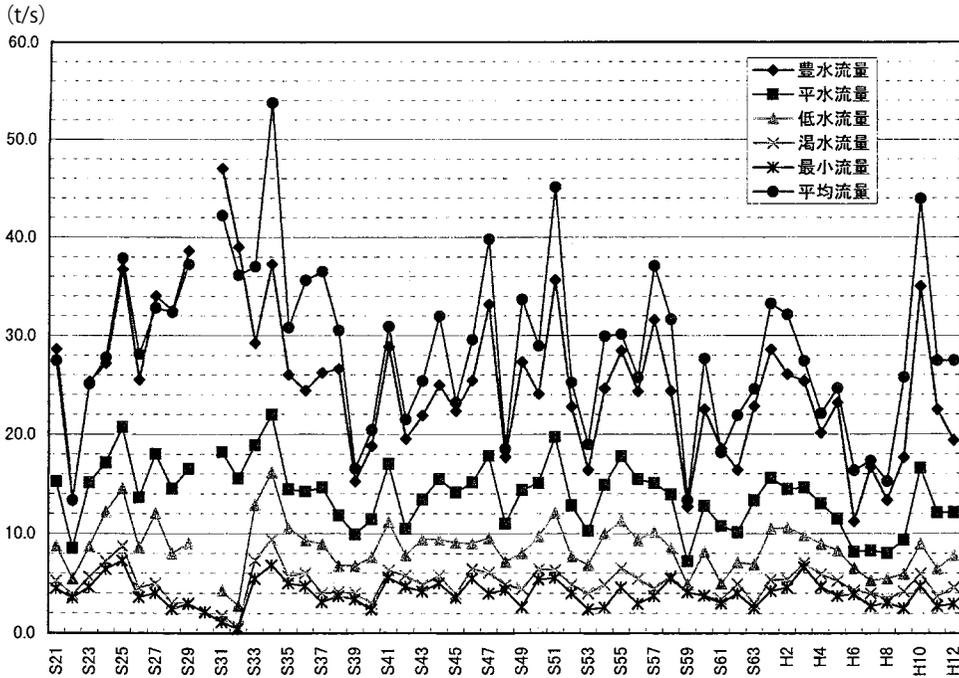


図-5 豊川 石田地点の流況<sup>7)</sup>

6) 「干潟域の水質浄化機能——色干潟を例にして——」青山裕晃, 今尾和正, 鈴木輝明 月刊海洋 Vol. 28, No. 2, p. 178~188, 1996  
 7) 国土交通省豊橋工事事務所資料

集中が挙げられる。図-6<sup>8)</sup>を見ると、豊橋市の世帯数は昭和35年から平成7年までに2倍以上増加し、人口も2倍近くまで増加している。世帯や人口の集中により浄化能力を超えた汚水が三河湾へと流入した

だろう。現在、豊橋市の下水道整備率は約75%となった<sup>9)</sup>。しかし、現在も含め、過去には多くの汚水が三河湾へと流れ込み、図-7<sup>10)</sup>に示すとおり三河湾内にヘドロとなって堆積し、窒素やリンを溶出させ

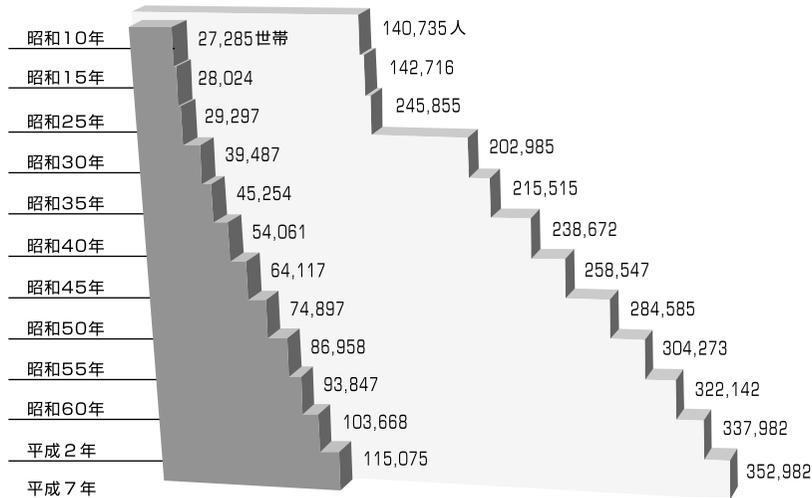


図-6 豊橋市の人口・世帯数の推移 (国勢調査)<sup>8)</sup>

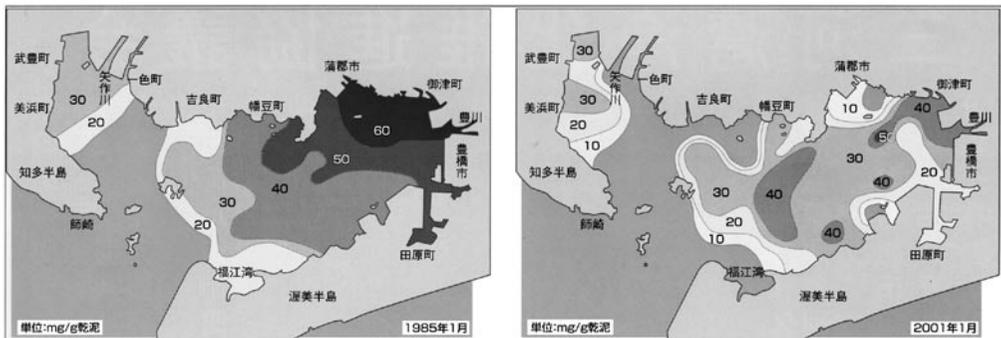


図-7 三河湾の底質 COD 平均分布 (表層泥0~5cm)<sup>10)</sup>  
資料：国土交通省 中部地方整備局 三河港湾工事事務所

8) 豊橋市勢要覧 豊橋市 1999

9) とよはしの上下水道 豊橋市上下水道局 2002

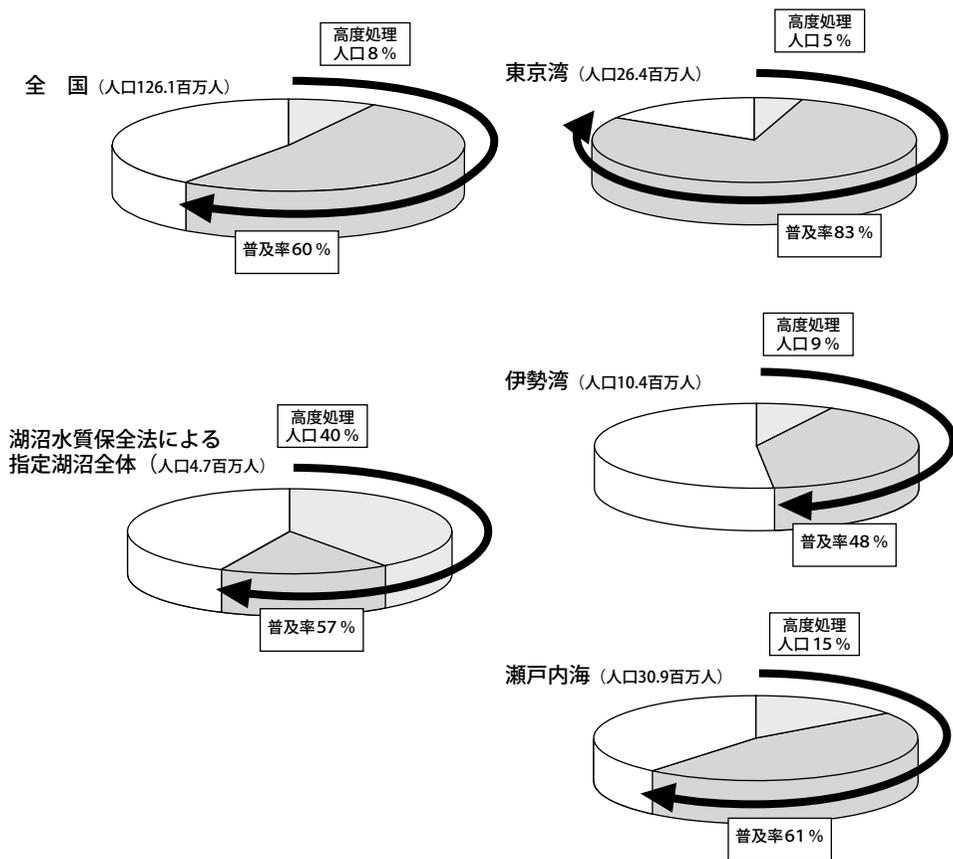
10) とりもどそう美しい三河湾 三河湾浄化推進協議会パンフレット 2002

ていると考えられる。又、公共下水道の処理面積のうち35%近くは合流式下水道であり<sup>9)</sup>、それも人口集中地区に多い。合流式下水道では、大雨時には未処理水がそのまま三河湾に注ぐ状況である。

次に、三河湾が他の閉鎖性水域と比較しても汚染されやすい状況にあり、このこと

も三河湾の汚染の主たる要因の一つと考えられることについて述べたい。

図-8<sup>11)</sup>にあるように下水道の整備状況を伊勢湾全体で見ると48%である。一方、東京湾に関連した地域は83%である。又、図-9<sup>12)</sup>のように、東京湾に関連した人口は伊勢湾に関連した人口の2.5倍もあるのに、それぞれの湾内に排出される汚染物質

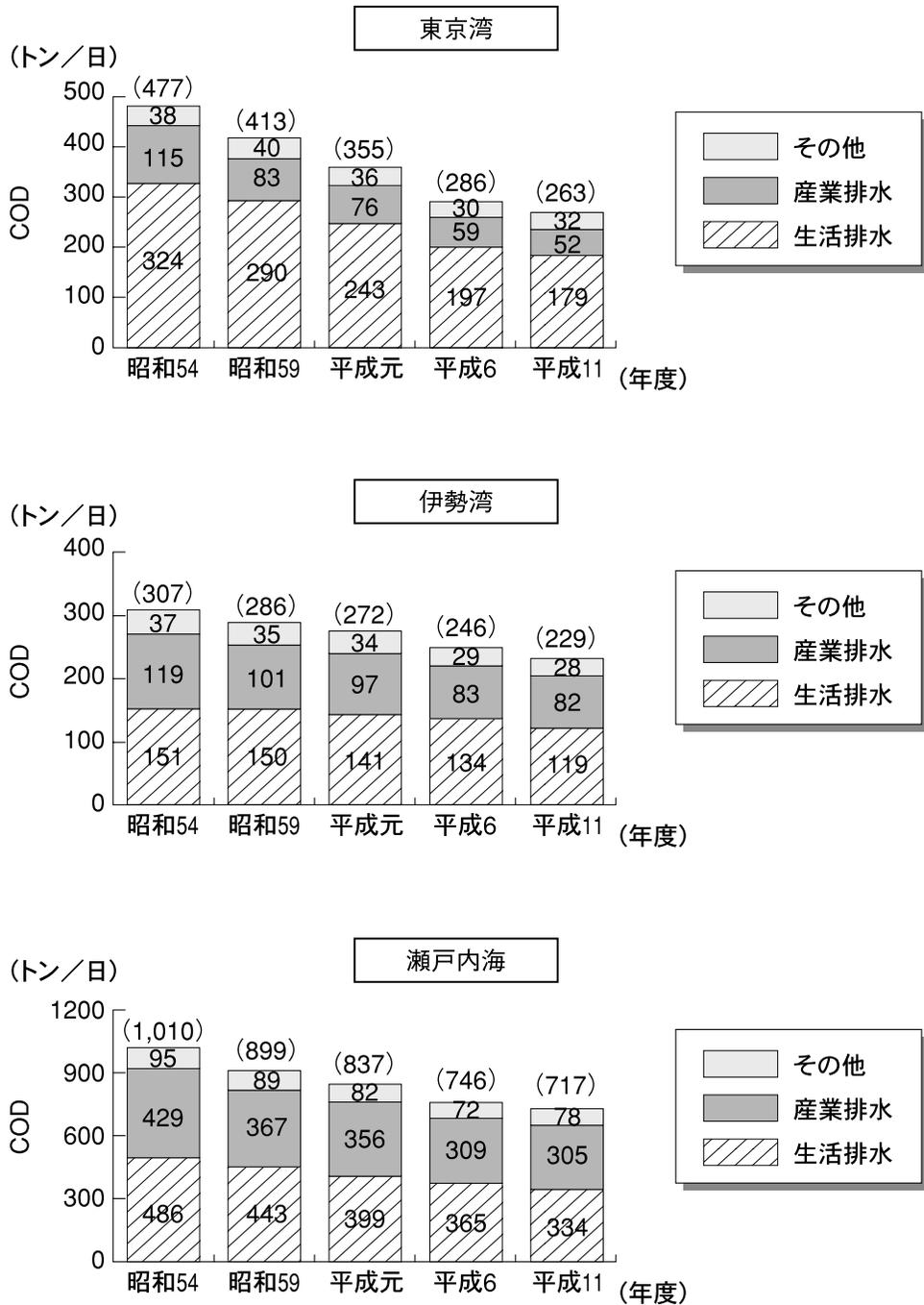


資料：国土交通省調べ（平成11年度末）

図-8 各閉鎖性水域の下水道普及率<sup>11)</sup>

11) 第38回下水道研究発表会資料 宇塚公一（国土交通省調べ）2001

12) 環境白書 2001



注：昭和54, 59, 平成元, 6年度は実績値。平成11年度は削減目標量。平成6年度については渇水の影響を受けている。

資料：環境庁

図-9 総量規制3海域における発生源別発生負荷量 (COD) の推移と削減目標量 (単位：トン/日)<sup>12)</sup>

の量はほとんど同じである。図-10~12<sup>13)</sup>は各海域のCOD、全窒素濃度、全リン濃度の状況である。CODの値は三河湾が最も高くなっている。又、全窒素濃度、全リン濃度は下水道整備率の高さも反映して、東京湾が飛びぬけて高くなっている。窒素やリンは下水道施設によって有機物を分解した結果の産物でもある。なお下水道において窒素やリンも処理できる高度処理の普及が求められているところであるが、高度処理については、その建設費を何によって賄うか等の課題があり、整備率が急激に伸びると言うことがあまり期待できないという問題を抱えている。

さらに三河湾の汚染の原因として考えられるものとして、三河地方の農畜産業の盛んなことが挙げられるだろう。

汚濁負荷には、生活廃水、産業排水以外にも発生源を特定できない「面源負荷（ノンポイント汚濁）」と呼ばれるものがあり、その主なものは市街地や農地から来るものである。たとえば、霞ヶ浦の汚濁負荷のうちCODの45%、全窒素の37%、全リンの20%が面源負荷である。<sup>4)</sup> 又、琵琶湖についてもCODの45%、全窒素の50%、全リンの28%が面源負荷に由来する。<sup>11)</sup> 三河湾の面源負荷の割合は不明であるが、三河湾に関連した地域の農畜産業が大変盛んであることを考えれば、農畜産業に起因する面源負荷が三河湾の負荷の大きな原因の一つであろう事は推測できる。

又、三河湾の地形などを、東京湾など他の閉鎖性水域と比較したものが表-1<sup>10)</sup>で

ある。三河湾の汚濁を他の閉鎖性水域と比較する場合は、この図のような地形条件や潮流との関係などにに基づき、多面的に閉鎖性の度合いや、窒素やリンの溶出の程度などについて比較する必要があるだろう。

## 7. 終わりに

この拙文の始めに、「水」に対する意識の向上のためには、特に自分の目で見ることが有効な方法であることを述べた。人は様々なきっかけで「水」に対する意識が向上するであろう。

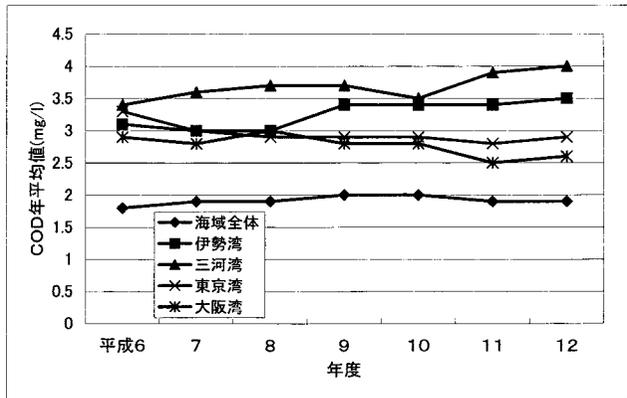
たとえば、何かのきっかけ（自然観察会や清掃活動等）で川に入る機会があったとしよう。そのとき川の水が濁っていたり、石や川底にたくさんのヌルヌルしたこけがびっしりと付いていたりすると、目で見ても、又、足の裏に川の汚れを感じるだろう。又、水の表面に油が浮いていたりすることもあるかもしれない。又、いやな臭いを感じる時もあるかもしれない。

いずれにしても、人の五感から入ってきた情報は印象に残るものであろう。「水」に対する意識の向上を図るには、まず、このようなきっかけをつかむことが第一歩である。

次に、「水」に対する意識を持った人が、真に「水」に対する意識の「向上」を図るには、出来得限りの多面的な科学的情報を知る必要がある。

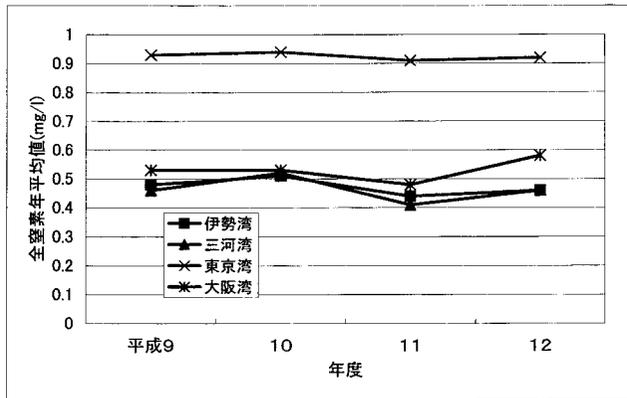
そして、何度も繰り返すが、そのための「専門家」の役割は重要である。もちろん、未だに科学の力に拠っても解明されていないことは多い。「専門家」はその限界もはっ

13) 愛知県環境部水環境課資料



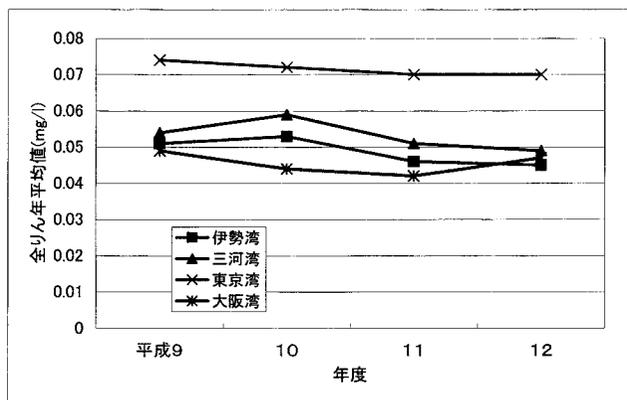
(注)伊勢湾は、三河湾を含む。

図-10 COD濃度の状況<sup>13)</sup>



(注)伊勢湾は、三河湾を含む。

図-11 全窒素濃度の状況<sup>13)</sup>



(注)伊勢湾は、三河湾を含む。

図-12 全りん濃度の状況<sup>13)</sup>

表-1 各閉鎖性水域の比較<sup>10)</sup>

区 分	三河湾	伊勢湾	東京湾	大阪湾	琵琶湖
面 積 (km <sup>2</sup> )	604	1,738	1,160	1,400	674
平均深度 (m)	9.2	19.5	38.6	27.5	43.0
流域面積 (km <sup>2</sup> )	3,624	14,294	7,540	5,737	3,848
主要流入河川	矢作川	木曾川	江戸川	淀 川	野洲川
	豊 川	長良川	荒 川	寝屋川	安曇川
	境 川	揖斐川	多摩川	神崎川	

資料：伊勢湾の総合的な利用と保全に係る指針

きりと示した上で、現時点の最善の研究成果を示す必要がある。そして、研究成果は多くの「専門家」が協力して、地球温暖化問題に対する IPCC の役割に示されるように、出来るだけ多くの側面から示す必要がある。そして、人々はそうやって得られた出来るだけ多面的な研究成果によって、物事を判断するように努めなければならない。

私はしばしば、ある科学的な一つの側面のみに注目して、実りの少ない議論が交わされるのを聞くことがあり、大変残念に感じている。これからは、できるだけ多くの科学的情報により、「水」に対する「正しい」意識の向上を図り、実りのある議論が交わされるようになることを願っている。